

# 第2部 ロボット機構学 (Robot Kinematics)

宇都宮大学工学研究科 吉田勝俊

2015.10.1 版

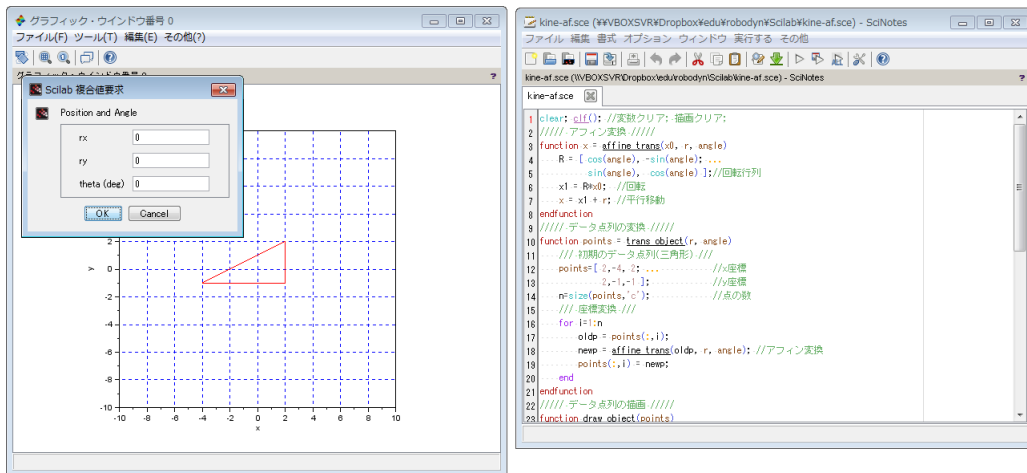
## 目次

5	位置ベクトルと座標系	2
5.1	ベクトルとその成分	2
5.2	基底の回転	3
5.3	3次元の回転行列	4
6	多体系の運動学	6
6.1	座標系と空間座標	6
6.2	部品図と組立図	6
6.3	部品図から組立図への座標変換	8
7	ロボット運動学	9
7.1	アフィン変換の行列表示	9
7.2	ロボット・マニピュレータ	10
A	プログラム例	14

▶▶ (Scilab について) これ以降に提示するプログラム例は、Scilab というフリーの数値解析ソフトで書かれている。Scilab は市販の Matlab とほぼ同等の機能を持ち、Windows, Linux, Mac OS で安定に動作する。使い方の概要を「Scilab 超入門 - 吉田の教材文庫」

<http://edu.katzlab.jp/lec/scilab>

にまとめておいた。空き時間に自習しておくこと。自習を前提にレポートを課す。



## 5 位置ベクトルと座標系

### 5.1 ベクトルとその成分

平面上の幾何ベクトル  $x$  (矢印) を考える．矢印は，算数を知らない幼児にも描ける図形であり，成分(数値)とは無関係に存在する．

こうした図形を数値化するため，図1のように，幾何ベクトル  $x$  の縦横の寸法  $x_1, x_2$  を測る．得られた寸法からなる数ベクトル  $\tilde{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix}$  を， $x$  の直交成分 (orthogonal component) という．しかし，寸法の測り方は縦横だけではない．図2のように斜めに測

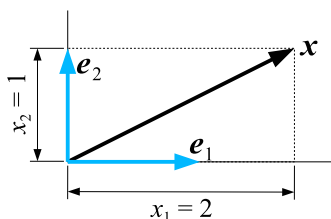


図 1:  $x$  の直交成分

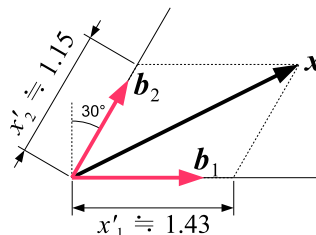


図 2: 同じ  $x$  の斜交成分 (図の寸法は実測値で誤差を含む)

ると，同じベクトル  $x$  でも寸法の値は変化する．このような， $x$  を対角線とする平行四辺形の 2 辺の寸法  $\tilde{x}' = \begin{bmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1.43 \\ 1.15 \end{bmatrix}$  を， $x$  の斜交成分 (oblique component) という．

このように，幾何ベクトル  $x$  の成分とは寸法のことであり，寸法の測り方しだいで成分は変化する．

以上を代数化する．直方体の 2 辺の方向を，単位ベクトル<sup>1)</sup>  $e_1, e_2$  で表すと，図1の測量操作は，次のように数式表現できる．

$$\text{ベクトル } x \xrightarrow{\text{展開}} x = x_1 e_1 + x_2 e_2 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \text{成分} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x} \quad (5.1)$$

同様に，図2については，

$$\text{ベクトル } x \xrightarrow{\text{展開}} x = x'_1 b_1 + x'_2 b_2 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \text{成分} \begin{bmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x}' \quad (5.2)$$

である．空間の 3 次元ベクトルについても同様に成分が定義できる．

**算法 2.1 (ベクトルの成分表示)** 成分測定用のベクトルの組  $\mathcal{E} = \langle e_1, e_2, e_3 \rangle$  を，基底 (basis) という．ベクトル  $x$  を基底  $\mathcal{E}$  で展開する．

$$x = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x} \quad (5.3)$$

このときの展開係数  $\tilde{x}$  を，ベクトル  $x$  の成分 (component) という．本書では， $\mathcal{E}$  で測った  $x$  の成分を， $[x]_{\mathcal{E}}$  または  $\tilde{x}_{\mathcal{E}}$  と書く．

<sup>1)</sup>長さが 1 のベクトル．

### 実習 2.1

1. 基底  $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$  で測った, ベクトル  $v = 1i + 3j + 2k$  の成分  $\tilde{v}_{\mathcal{E}}$  を求めよ.
2. 基底  $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$  で測った, ベクトル  $w = 3j + 2k$  の成分  $\tilde{w}_{\mathcal{E}}$  を求めよ.
3. 基底  $\mathcal{B} = \langle i + j, i - j, k \rangle$  で測った, ベクトル  $w = 3j + 2k$  の成分  $\tilde{w}_{\mathcal{B}}$  を求めよ.

### 5.2 基底の回転

平面上に正規直交基底  $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$  をとる<sup>2)</sup>. これを右ねじ方向 ( $i$  を  $j$  に回す向き) に角度  $\theta$  だけ回したものを

$$R_{\theta}(\mathcal{E}) := \langle R_{\theta}(i), R_{\theta}(j) \rangle \quad (5.4)$$

と書く. このとき, 作図より,

$$R_{\theta}(i) = \cos \theta i + \sin \theta j, \quad R_{\theta}(j) = -\sin \theta i + \cos \theta j \quad (5.5)$$

となる.

実習 2.2 ノートに図示せよ.

ここで,  $R_{\theta}(\mathcal{E})$  で測った  $x$  の成分を  $\tilde{x}_{R_{\theta}(\mathcal{E})} = (x', y')^T$  とすると,

$$\begin{aligned} x &= x'R_{\theta}(i) + y'R_{\theta}(j) = x'(\cos \theta i + \sin \theta j) + y'(-\sin \theta i + \cos \theta j) \\ &= (x' \cos \theta - y' \sin \theta)i + (x' \sin \theta + y' \cos \theta)j \end{aligned} \quad (5.6)$$

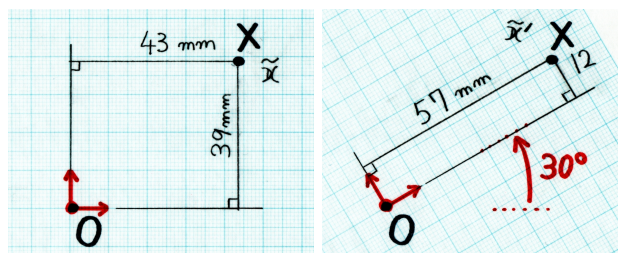
となる. ゆえに, 同じベクトル  $x$  を元の基底  $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$  で測った成分  $\tilde{x}_{\mathcal{E}} = (x, y)^T$  は,

$$\tilde{x}_{\mathcal{E}} = \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x' \cos \theta - y' \sin \theta \\ x' \sin \theta + y' \cos \theta \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}}_{[R_{\theta}]} \begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} = [R_{\theta}] \tilde{x}_{R_{\theta}(\mathcal{E})} \quad (5.7)$$

のように表すことができる. 行列  $[R_{\theta}]$  を (2次元の) 回転行列という. 逆変換は逆回転であるから, 次の関係が成立する.

$$[R_{\theta}]^{-1} = [R_{-\theta}] = \begin{bmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix} \quad (5.8)$$

実習 2.3 正規直交基底  $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$  と, これを  $30^{\circ}$  だけ回した基底  $R_{30^{\circ}}(\mathcal{E}) = \langle R_{30^{\circ}}(i), R_{30^{\circ}}(j) \rangle$  をとる. あるベクトル  $x$  について,  $\tilde{x}_{R_{30^{\circ}}(\mathcal{E})} = (57, 12)^T$  であるとき,  $\tilde{x}_{\mathcal{E}}$  を求めよ.



同様の関係式が 3 次元でも成立する.

<sup>2)</sup> 「正規」とは, 基底ベクトルの長さが  $|i| = |j| = 1$  であること.

算法 2.2 (基底の回転) 正規直交基底  $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$  と, これを 3 次元回転させた基底  $R(\mathcal{E}) = \langle R(i), R(j), R(k) \rangle$  をとる. 任意の 3 次元ベクトル  $x$  について,

$$\tilde{x}_{\mathcal{E}} = [R] \tilde{x}_{R(\mathcal{E})} \quad \text{または} \quad \tilde{x}_{R(\mathcal{E})} = [R]^{-1} \tilde{x}_{\mathcal{E}} \quad (5.9)$$

が成立する.  $[R]$  は 3 次元の回転を表す  $3 \times 3$  の回転行列である (成分は後述する).

### 5.3 3次元の回転行列

3次元の回転行列は, 9つの成分:

$$[R] := \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} \end{bmatrix} \quad (5.10)$$

を持つが, これらは互いに独立ではない. 仮に 9 成分を任意に設定できるなら, ベクトルの長さを変える変換が含まれるが, これはベクトルの長さを保つ回転変換に反する.

#### 5.3.1 回転軸 $a$ まわりの $\theta$ 回転

ベクトル  $x$  と同じ始点をもつ単位ベクトル  $a$  をとる.  $a$  を回転軸として,  $x$  を右ねじ方向に角度  $\theta$  だけ回転させる変換は, 若干手の込んだ作図より,

$$y = R(x) := (a \cdot x)a + \cos \theta \{x - (a \cdot x)a\} + \sin \theta (a \times x) \quad (5.11)$$

と表せる.  $\cdot$  は内積,  $\times$  はクロス積である. 正規直交基底  $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$  に対して,

$$x = x_1 i + x_2 j + x_3 k, \quad a = a_1 i + a_2 j + a_3 k \quad (5.12)$$

と展開したものを (5.11) に代入し, 内積とクロス積の性質,

$$i \cdot j = j \cdot k = k \cdot i = 0, \quad i \cdot i = j \cdot j = k \cdot k = 1,$$

$$i \cdot j = j \times k = k \times i = 0, \quad i \cdot j = k, \quad j \times k = i, \quad k \times i = j, \quad u \times v = -v \times u$$

で整理する. 得られた結果を,  $y = y_1 i + y_2 j + y_3 k$  と等値すると,

$$\begin{aligned} \tilde{y}_{\mathcal{E}} &= [R(a_1, a_2, a_3, \theta)] [\tilde{x}]_{\mathcal{E}} : \\ \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} &= \begin{bmatrix} a_1^2 + (1 - a_1^2)C_\theta & a_1 a_2(1 - C_\theta) - a_3 S_\theta & a_1 a_3(1 - C_\theta) + a_2 S_\theta \\ a_1 a_2(1 - C_\theta) + a_3 S_\theta & a_2^2 + (1 - a_2^2)C_\theta & a_2 a_3(1 - C_\theta) - a_1 S_\theta \\ a_1 a_3(1 - C_\theta) - a_2 S_\theta & a_2 a_3(1 - C_\theta) + a_1 S_\theta & a_3^2 + (1 - a_3^2)C_\theta \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \end{aligned} \quad (5.13)$$

という成分を得る ( $\cos \theta = C_\theta, \sin \theta = S_\theta$ ). この表現では, 回転行列の 9 成分  $R_{11}, R_{12}, \dots, R_{33}$  は各々 4 つのパラメータ  $a_1, a_2, a_3, \theta$  で表されるが, 単位ベクトルの制約条件  $a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$  があるので, 代数的には 3 つ  $a_i, a_j, \theta$  を指定すれば残りが決まる.

特にロボット・マニピュレータの議論では, 回転軸を  $x$  軸:  $\tilde{a} = (1, 0, 0)^T$ ,  $y$  軸:  $\tilde{a} = (0, 1, 0)^T$ ,  $z$  軸:  $\tilde{a} = (0, 0, 1)^T$  にとった次の回転行列がよく登場する.

$$[R_x(\theta)] = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & C_\theta & -S_\theta \\ 0 & S_\theta & C_\theta \end{bmatrix}, \quad [R_y(\theta)] = \begin{bmatrix} C_\theta & 0 & S_\theta \\ 0 & 1 & 0 \\ -S_\theta & 0 & C_\theta \end{bmatrix}, \quad [R_z(\theta)] = \begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \quad (5.14)$$

### 5.3.2 オイラー角

(5.14) の行列の掛け合わせで表した回転行列を、オイラー角という。

- Z-Y-Z 型 (狭義のオイラー角)  $[Euler(\phi, \theta, \psi)] := [R_z(\phi)][R_y(\theta)][R_z(\psi)]$
- X-Y-Z 型 (ロール・ピッチ・ヨー角)  $[RPY(\phi, \theta, \psi)] := [R_x(\phi)][R_y(\theta)][R_z(\psi)]$

いずれの方式も、回転行列の成分  $R_{11}, R_{12}, \dots, R_{33}$  が取りうる全ての値を  $\phi, \theta, \psi$  の組み合わせで表せる。用途に応じて、X, Y, Z の他の組み合わせも使用される。

Z-Y-Z 型は、コマの姿勢を表すのに適している。z 軸まわりに  $\psi$  だけスピンさせたコマを  $\theta$  だけ傾け、これを z 軸まわりに  $\phi$  だけ公転させた姿勢を表す。X-Y-Z 型は、車両 (または航空機) の姿勢表現によく使われる。x 軸を進行方向、z を鉛直上向きとして、操舵による回頭  $\psi$  をヨー角、左右への傾き  $\theta$  をロール角、前後への傾き  $\phi$  をピッチ角という。

このように、オイラー角は 3 つのパラメータ (必要最小限) で回転行列を表せるが、ジンバルロックという不具合を引き起こす欠点がある。

▶▶ (ジンバルロック) ある操作盤に、 $\phi$  用のツマミ、 $\theta$  用のツマミ、 $\psi$  用のツマミがあり、これら进行操作すると、X-Y-Z 型のオイラー角にしたがって物体の姿勢を操作できるとする。ツマミが 1 つ壊れても、残りの 2 方向は操作できるはずだが、そうならない場合がある。例えば、 $\theta$  のツマミが  $\pi/2$  の位置で壊れたとする。このとき、残りの  $\psi$  と  $\phi$  の回転軸が重なるので、 $\psi$  と  $\phi$  をどのように操作しても、1 軸まわりの回転しか起こせない。すなわち、実質的なツマミが 1 つ減る。このような不具合をジンバルロックという。ジンバルロックを引き起こす  $\theta = \pi/2$  のような姿勢を特異点という。

### 5.3.3 オイラーパラメータ (クォータニオン)

人工衛星の姿勢制御だとか、体操選手の「前方かかえ込み 2 回宙返り 1/2 ひねり」など、ものすごいグルグル回る対象を計算したいとき、オイラー角のジンバルロックは致命的である。ジンバルロックを解消するには、(5.13) の回転軸  $\tilde{a} = (a_1, a_2, a_3)$  と回転角  $\theta$  に戻ればよい。ただし、そのまま使うことは稀で、面倒な三角関数  $\sin, \cos$  を嫌って、

$$\mathbf{q} = (q_0, q_1, q_2, q_3)^T := \left( \cos \frac{\theta}{2}, a_1 \sin \frac{\theta}{2}, a_2 \sin \frac{\theta}{2}, a_3 \sin \frac{\theta}{2} \right)^T \quad (5.15)$$

という書き直しが行われる。書き直した  $\mathbf{q}$  を、オイラーパラメータ (Euler parameters) もしくは単位クォータニオンという。

オイラーパラメータ  $\mathbf{q}$  を使うと (5.13) の回転行列は、

$$[R(a_1, a_2, a_3, \theta)] = \begin{bmatrix} 1 - 2q_2^2 - 2q_3^2 & 2q_1q_2 - 2q_0q_3 & 2q_0q_2 + 2q_1q_3 \\ 2q_1q_2 + 2q_0q_3 & 1 - 2q_1^2 - 2q_3^2 & -2q_0q_1 + 2q_2q_3 \\ -2q_0q_2 + 2q_1q_3 & 2q_0q_1 + 2q_2q_3 & 1 - 2q_1^2 - 2q_2^2 \end{bmatrix} =: [R(\mathbf{q})], \quad (5.16)$$

$$\text{ただし、} q_0^2 + q_1^2 + q_2^2 + q_3^2 = 1. \quad (5.17)$$

に書きかわる ( $\because \sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1, a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$ )。成分から三角関数が消えてスッキリしたが、見た目だけではない。 $(a_1, a_2, a_3, \theta)$  において、 $\sin \theta, \cos \theta, a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$  の果たした役割が、1 本の拘束条件 (5.17) に集約されてしまった。というわけで、オイラーパラメータ  $\mathbf{q}$  を計算するときは、三角関数のことは忘れて、単なる 2 次式であるところの拘束条件 (5.17) だけ念頭に置けばよい。この新しい表現において、ジンバルロックは起らない。

## 6 多体系の運動学 (Multibody Kinematics)

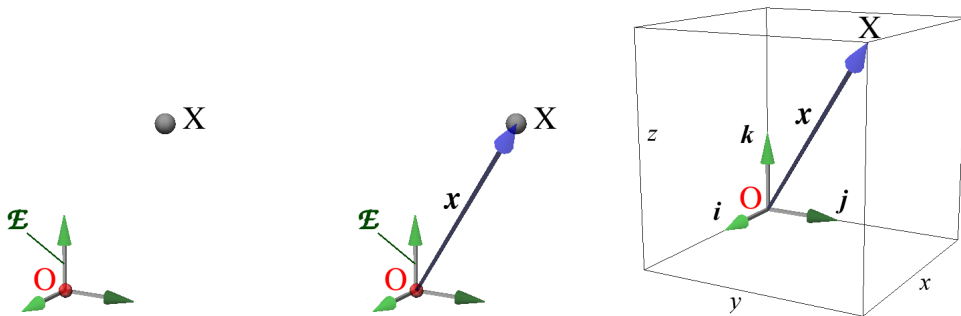
ロボットの各関節が時々刻々と角度を変え、手先がある運動経路を実現する。このような複数の部品からなる構造を、多体系 (multibody system) という。ここでは、このような多体系の姿勢を数式表現する。最後に、仮想マニピュレータをキーボードで操作する。

### 6.1 座標系と空間座標

点  $X$  の空間座標  $\tilde{X}_{(O,\mathcal{E})}$

1. 測定基準点  $O$  と基底  $\mathcal{E}$  を選ぶ。その組  $(O, \mathcal{E})$  を座標系という。
2.  $O \sim X$  に矢印  $x$  を引く。この  $x$  を位置ベクトルという。
3.  $\mathcal{E}$  による  $x$  の成分  $\tilde{x}_{\mathcal{E}} = (x, y, z)^T$  を  $(O, \mathcal{E})$  で測った  $X$  の空間座標という<sup>3)</sup>。

$$\text{本書の表記: } \tilde{X}_{(O,\mathcal{E})} \equiv \tilde{x}_{\mathcal{E}} = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} \quad (6.1)$$



### 6.2 部品図と組立図

パソコンの階層的なフォルダのように、多体系の姿勢を部品図と組立図で整理する。

#### 6.2.1 部品図 — 局所座標系

まず、多体系を構成する各部品の形状をデータ化する。

部品形状の表現

1.  $i$  番目の部品用の部品図を用意する。
2. その部品図に直交座標系  $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$  を設定する。  
部品図に原点  $O_i$  を定め、直交基底  $\mathcal{E}_i$  の方向を決める。
3. 部品の代表点  $P_1, \dots, P_k$  を、 $\mathcal{E}_i$  による座標  $\xi_1^i, \dots, \xi_k^i$  として記録・保持する。  
これらの座標データの集合を  $\mathcal{X}_i := \{\xi_1^i, \dots, \xi_k^i\}$  で表す。

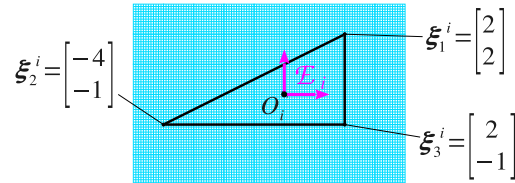
<sup>3)</sup> $(\dots)^T$  は転置を表す。

部品ごとに設定する直交座標系  $\mathcal{E}_i$  のことを，局所座標系 (local coordinate system; local frame) という．この  $\mathcal{E}_i$  で測った部品図上の座標  $\xi_1^i, \dots, \xi_k^i$  を局所座標 (local coordinate) という．一つ気付く点として，

- 部品が剛体であれば，その形状を表す局所座標は，永遠不変の定ベクトルとなる．

ということに注意しよう．

方眼紙に部品図を作成した例を以下に示す．一応， $i$  番目の部品という想定である．



この部品の代表点を 3 頂点として，図の局所座標系で測ると，形状データは，

$$\mathbf{x}_i = \{\xi_1^i, \xi_2^i, \xi_3^i\} = \left\{ \begin{bmatrix} 2 \\ 2 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} -4 \\ -1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \right\}$$

となる．3 角形なので 3 頂点としたが，もちろん，別の選び方をしてもよい．

### 6.2.2 組立図 — 基準座標系

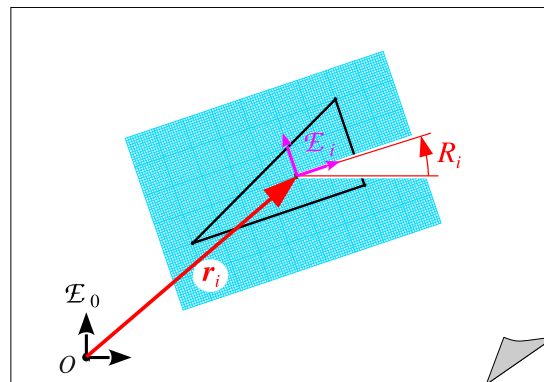


図 3: 組立図上の部品図

部品図が完成したら，図 3 のように，組立図<sup>4)</sup>に配置する．トレース紙に書いた部品図を組立図上を滑らせて配置するイメージだ．この状況を次の手順で数式表現する．

#### 部品図の位置と姿勢

1. 組立図用の直交座標系  $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$  をとる．
2. 部品図  $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$  の位置を， $\mathcal{E}_0$  上の位置ベクトル  $\mathbf{r}_i = \overrightarrow{OO_i}$  で表す．
3. 部品図  $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$  の姿勢を，回転変換  $R_i$  で表す．  
 $R_i$  は，基準基底  $\mathcal{E}$  を， $\mathcal{E}_i$  になるまで回す変換． $\mathcal{E}_i = R_i(\mathcal{E})$  と表記する．
4. 組立図  $\mathcal{E}_0$  に対する部品図  $\mathcal{E}_i$  の配置を，ペア  $(\mathbf{r}_i, R_i)$  で表す．

<sup>4)</sup>部品を本来の位置に配置した全体像の図面を「組立図」という．

組立図にとる座標系  $\mathcal{E}_0$  のことを，基準座標系 (reference coordinate system; reference frame) という． $\mathcal{E}_0$  で測った座標を，基準座標 (reference coordinate) という．

### 6.3 部品図から組立図への座標変換

部品図上の局所座標と，組立図上の基準座標は，次の算法で関係づけられる．

算法 2.3 基準座標系 (組立図) に対する局所座標系 (部品図) の配置を  $(r, R)$  とする．このとき，局所座標  $\xi$  が指す点は，基準座標，

$$x = R\xi + r \quad (6.2)$$

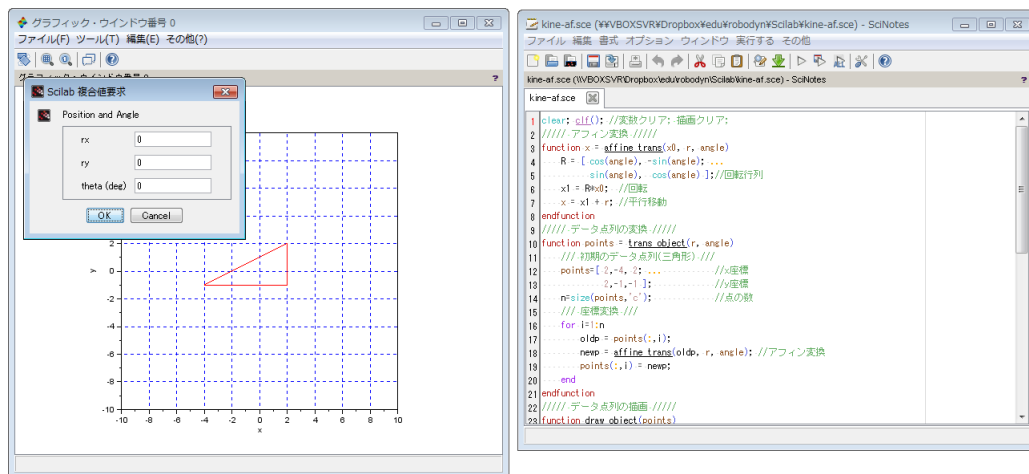
の位置にくる．このような，回してから平行移動する変換のことを，アフィン変換 (affine transformation) という<sup>5)</sup>．(証明は図 3 p7 より明らか)

算法 2.3 を使うと，複数の部品間の結合や接触が議論できる．2 つの部品  $i, j$  が，互いに結合/接触するということは，両者が空間の同一点を占めていることに他ならないが，局所座標  $\xi_i, \xi_j$  で比較するのは無意味である．なぜなら，部品図を組立図にどう置くかで，結果が変わってしまう．そこで，組立図に対する部品図の配置  $(r_i, R_i), (r_j, R_j)$  の情報を使って，算法 2.3 により，両者の基準座標，

$$x^i = R_i\xi^i + r_i, \quad x^j = R_j\xi^j + r_j \quad (6.3)$$

をとる．このとき， $x^i = x^j$  は組立図上の同じ点を表す．このような共通の基準座標をもつ 2 つの部品は，結合/接触の状態にあるといえる．

実習 2.4 Code 1 p14 を実行せよ．ダイアログボックスに  $r$  の成分と回転角を入力すると，6.2.2 節 p7 の組立図上の三角形が実際に平行移動・回転する．



<sup>5)</sup> 同じ affine を「アファイン」と読む本も多い．



## 7 ロボット運動学

### 7.1 アフィン変換の行列表示

アフィン変換 (6.2)  $p_8$  を，成分が見えるように書くと，

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} \\ R_{21} & R_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} r_1 \\ r_2 \end{bmatrix} \quad 2 \text{次元} \quad (7.1a)$$

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ \xi_3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} r_1 \\ r_2 \\ r_3 \end{bmatrix} \quad 3 \text{次元} \quad (7.1b)$$

のような格好をしている．ここで先人のアイデアだが，以上の変換則は，

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ 1 \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & r_1 \\ R_{21} & R_{22} & r_2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}}_H \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ 1 \end{bmatrix} \quad 2 \text{次元} \quad (7.2a)$$

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ 1 \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} & r_1 \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} & r_2 \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} & r_3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}}_H \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ \xi_3 \\ 1 \end{bmatrix} \quad 3 \text{次元} \quad (7.2b)$$

のようにすると，単独の行列  $H$  で表せる．この変換式 (7.2) を同次変換 (homogeneous transformation) といい，行列  $H$  を同次変換行列という<sup>6)</sup>．ちなみに，ベクトルの末尾に追加した“1”は，こうした算法上のトリックを実現するためのダミー成分であり，物理的な意味はない．実用上は，注目するベクトル  $x$  の末尾に“1”を追加して，同次変換を行い，同次変換が済んだら，末尾の“1”を取り除く．

実習 2.5 行列とベクトルの積を実行し，(7.2a) の上 2 行が (7.1a) に一致すること，(7.2b) の上 3 行が (7.1b) に一致することを示せ．

ロボット工学や 3 次元 CG (Computer Graphics) の分野では，表 1 ~ 表 2  $p_{10}$  のような同次変換行列がよく使われる．

実習 2.6 実習 2.4 のアフィン変換を，同次変換に書き換えよ．これを実行せよ．

▶ 解答例 書き変えたプログラム例を Code 2  $p_{14}$  に示す．動作は実習 2.4 と同じである．

表 1: 同次変換行列  $H$  の例 (2 次元)  $C_\theta := \cos \theta, S_\theta := \sin \theta$

作用	表記	成分
平行移動	Trans( $[r_i]$ ) または Trans( $r_1, r_2$ )	$\begin{bmatrix} 1 & 0 & r_1 \\ 0 & 1 & r_2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
回転	Rot( $\theta$ )	$\begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
拡大縮小	Scal( $\alpha, \beta$ )	$\begin{bmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$

<sup>6)</sup>または，Denavit-Hartenberg (デナビット・ハーテンベルグ) の変換行列ともいう．詳細は吉川 [1] の 1 章など．

表 2: 同次変換行列  $H$  の例 (3次元)  $C_\theta := \cos \theta, S_\theta := \sin \theta$

作用	表記	成分
平行移動	Trans( $[r_i]$ ) または Trans( $r_1, r_2, r_3$ )	$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & r_1 \\ 0 & 1 & 0 & r_2 \\ 0 & 0 & 1 & r_3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
$x$ 軸回転	Rot( $x, \theta$ )	$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & C_\theta & -S_\theta & 0 \\ 0 & S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
$y$ 軸回転	Rot( $y, \theta$ )	$\begin{bmatrix} S_\theta & 0 & C_\theta & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ C_\theta & 0 & -S_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
$z$ 軸回転	Rot( $z, \theta$ )	$\begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$
$a$ 軸回転	Rot( $\mathbf{a}, \theta$ )	$\begin{bmatrix} & & & 0 \\ & & & 0 \\ & & & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ 3次元の回転行列
拡大縮小	Scal( $\alpha, \beta, \gamma$ )	$\begin{bmatrix} \alpha & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \gamma & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$

## 7.2 ロボット・マニピュレータ

図4の4自由度マニピュレータを例にとる．このマニピュレータは，手首が旋回し，肘

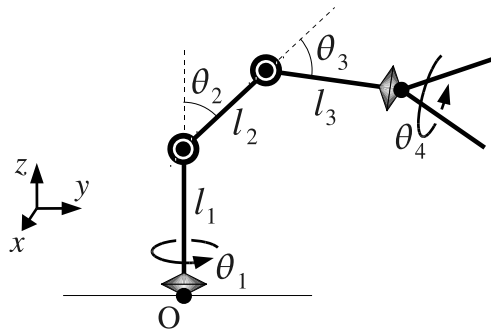


図 4: 4自由度マニピュレータ

と肩が屈曲し，それ全体が旋回できる．基準座標系  $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$  の原点  $O$  をマニピュレータの根本にとり，基底  $\mathcal{E}$  は図の向きに取る ( $x$  軸は紙面垂直こちら向き)．

表1～表2の同次変換を組み合わせて，図4のマニピュレータの姿勢を表現してみる．手先からたどっていくのがコツである．

【Step 1】 まず，図5左上の局所座標系  $\mathcal{E}_1$  に，手先の部品図を作成する．図の3点を代表点としよう．手首  $\xi_1^1$  に  $\mathcal{E}_1$  の原点  $O_1$  をとる．

$$\mathcal{X}_1 = \{\xi_1^1, \xi_2^1, \xi_3^1\} \quad (7.3)$$

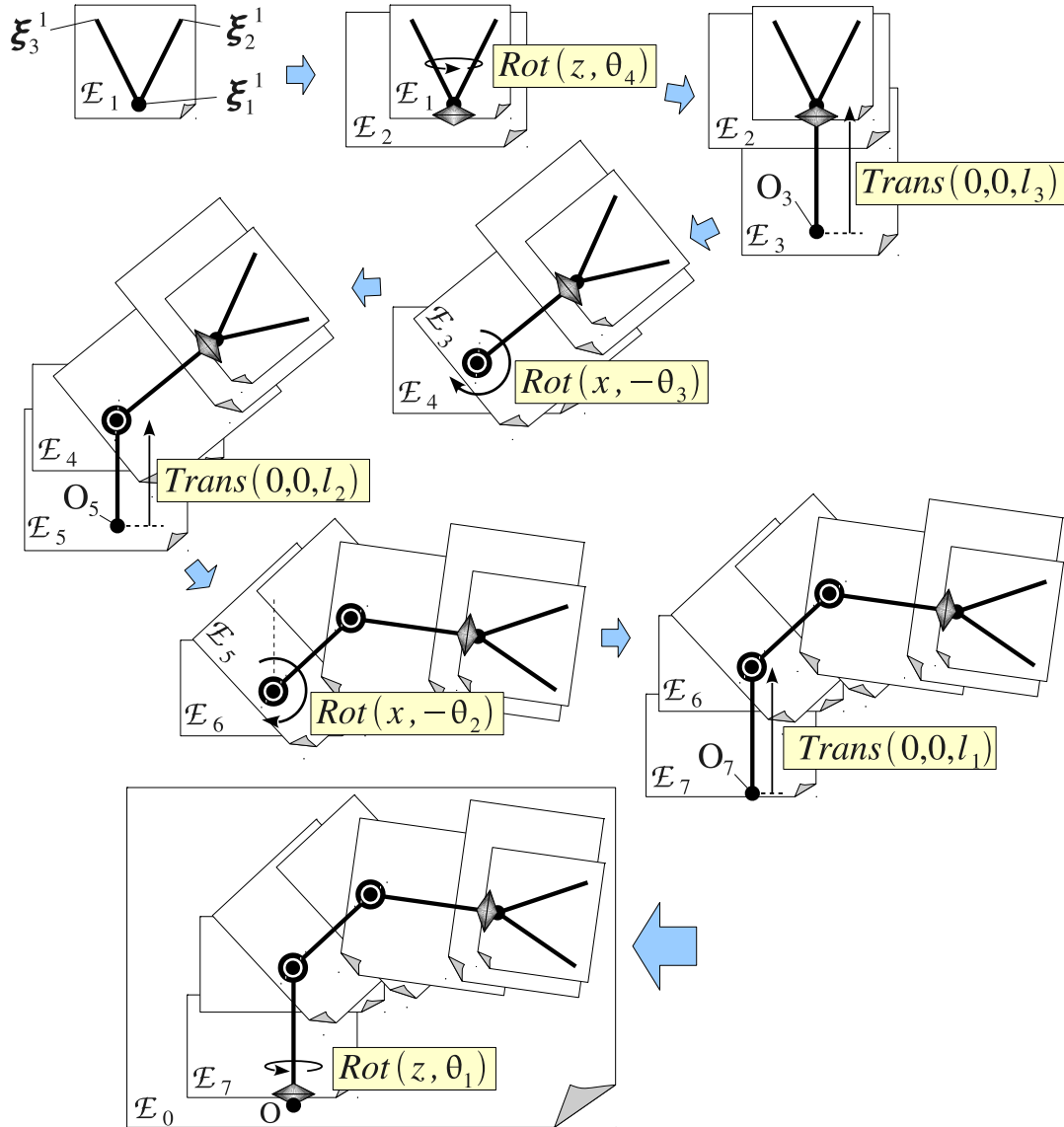


図 5: 4 自由度マニピュレータの運動学

【Step 2】  $\mathcal{E}_1$  の原点  $O_1$  (手首) を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_2$  の原点  $O_2$  に重ね,  $\mathcal{X}_1$  を  $\mathcal{E}_2$  に対して  $\theta_4$  だけ  $z$  軸回転させる. この変換を,

$$\text{Rot}(z, \theta_4)\mathcal{X}_1 := \{\text{Rot}(z, \theta_4)\xi_1^1, \text{Rot}(z, \theta_4)\xi_2^1, \text{Rot}(z, \theta_4)\xi_3^1\}$$

と表記しよう. このとき,  $\mathcal{E}_2$  上の代表点  $\mathcal{X}_2$  は,

$$\mathcal{X}_2 = R_2\mathcal{X}_1 := \{R_2\xi_1^1, R_2\xi_2^1, R_2\xi_3^1\}, \quad R_2 := \text{Rot}(z, \theta_4) \quad (7.4)$$

となる.

【Step 3】  $\mathcal{E}_2$  の原点  $O_2$  を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_3$  の原点  $O_3$  に重ね,  $\mathcal{X}_2$  を  $\mathcal{E}_3$  に対してリンク長  $l_3$  分だけ  $z$  軸方向に平行移動する.

$$T_3\mathcal{X}_2 = T_3R_2\mathcal{X}_1 = \{T_3R_2\xi_1^1, T_3R_2\xi_2^1, T_3R_2\xi_3^1\}, \quad T_3 := \text{Trans}(0, 0, l_3)$$

これに,  $\mathcal{E}_3$  の原点  $O_3 = \mathbb{O}$  を付加した集合,

$$\mathcal{X}_3 = \{T_3 R_2 \xi_1^1, T_3 R_2 \xi_2^1, T_3 R_2 \xi_3^1, \mathbb{O}\} \quad (7.5)$$

が, 部品図  $\mathcal{E}_3$  上の代表点となる.

**【Step 4】**  $\mathcal{E}_3$  の原点  $O_3$  を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_4$  の原点  $O_4$  に重ね,  $\mathcal{X}_3$  を  $\mathcal{E}_4$  に対して肘角度  $\theta_3$  だけ  $x$  軸回転させる.

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_4 = R_4 \mathcal{X}_3 &= \{R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_4 \mathbb{O}\} \\ &= \{R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \mathbb{O}\}, \quad R_4 := \text{Rot}(x, -\theta_3) \end{aligned} \quad (7.6)$$

角度の正は, 紙面手前に進む右ねじの回転方向なので, 図 4 のとり方に合せて  $-\theta_3$  とした. 零ベクトル  $\mathbb{O}$  を回転しても  $\mathbb{O}$  なので,  $R_4 \mathbb{O} = \mathbb{O}$  とした.

**【Step 5】**  $\mathcal{E}_4$  の原点  $O_4$  を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_5$  の原点  $O_5$  に重ね,  $\mathcal{X}_4$  を  $\mathcal{E}_5$  に対してリンク長  $l_2$  分だけ  $z$  軸方向に平行移動する. これに,  $\mathcal{E}_5$  の原点  $O_5$  を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_5 = T_5 \mathcal{X}_4 \cup \{\mathbb{O}\} &= \{T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, T_5 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \\ T_5 &:= \text{Trans}(0, 0, l_2) \end{aligned} \quad (7.7)$$

を  $\mathcal{E}_5$  上の代表点とする.

**【Step 6】**  $\mathcal{E}_5$  の原点  $O_5$  を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_6$  の原点  $O_6$  に重ね,  $\mathcal{X}_5$  を  $\mathcal{E}_6$  に対して肩角度  $\theta_2$  だけ  $x$  軸回転させた集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_6 = R_6 \mathcal{X}_5 &= \{R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_6 T_5 \mathbb{O}, R_6 \mathbb{O}\} \\ &= \{R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_6 T_5 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \\ R_6 &:= \text{Rot}(x, \theta_2) \end{aligned} \quad (7.8)$$

を  $\mathcal{E}_6$  上の代表点とする. 回転の場合は代表点は追加しない.

**【Step 7】**  $\mathcal{E}_6$  の原点  $O_6$  を, 次の局所座標系  $\mathcal{E}_7$  の原点  $O_7$  に重ね,  $\mathcal{E}_6$  をリンク長  $l_1$  分だけ  $z$  軸方向に平行移動し, これに原点  $O_7$  を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_7 = T_7 \mathcal{X}_6 \cup \{\mathbb{O}\} &= \{T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \\ &T_7 R_6 T_5 \mathbb{O}, T_7 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \quad T_7 := \text{Trans}(0, 0, l_1) \end{aligned} \quad (7.9)$$

を  $\mathcal{E}_7$  上の代表点とする.

**【Step 8】** 最後に,  $\mathcal{E}_7$  の原点  $O_7$  を, 基準座標系  $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$  の原点に重ね,  $\theta_1$  だけ  $z$  軸回転させ, これに基準座標の原点  $O = \mathbb{O}$  を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_0 &= \{R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \\ &R_8 T_7 R_6 T_5 \mathbb{O}, R_8 T_7 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \quad R_8 := \text{Rot}(z, \theta_1) \end{aligned} \quad (7.10)$$

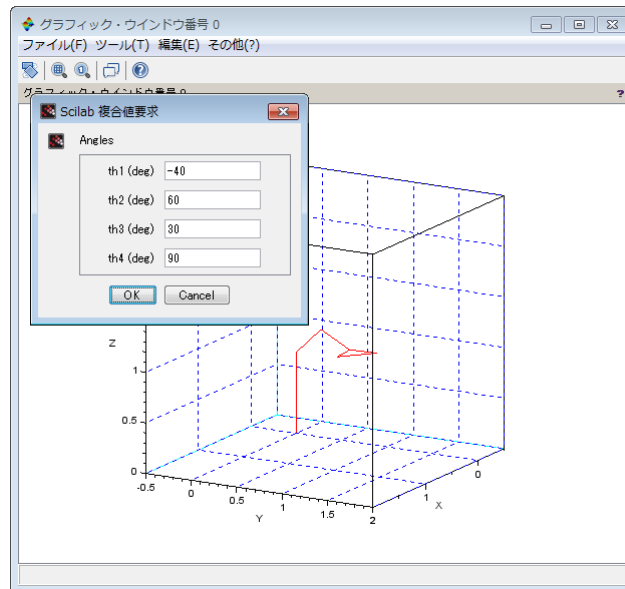
を作る. ( $R_8 \mathbb{O} = \mathbb{O}$ )

この  $\mathcal{X}_0$  が，基準座標系  $\mathcal{E}_0$  における図 4 のマニピュレータの形状データとなる．改めて列挙すると，次のようになる．

$$\left\{ \begin{array}{ll} \xi_1^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_1^1 & \text{手首} \\ \xi_2^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_2^1 & \text{手先 1} \\ \xi_3^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_3^1 & \text{手先 2} \\ \xi_4^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 \circlearrowleft & \text{肘} \\ \xi_5^0 = R_8(\theta_1) T_7 \circlearrowleft & \text{肩} \\ \xi_6^0 = \circlearrowleft & \text{根本} \end{array} \right. \quad (7.11)$$

各回転変換  $R_i$  は角度に依存するので， $R_i(\text{角度})$  の形式で書いた．他方，リンク長  $l_i$  を定数と仮定すれば平行移動  $T_i$  は定数行列となる．

実習 2.7 Code 3 p15 を実行せよ．実習 2.4 などと同様の操作でリンク機構が動作する．



## 参考文献

- [1] P.R. ホール著・吉川恒夫訳：「ロボット・マニピュレータ」(コロナ社，2002年)

## A プログラム例

Code 1: "kine-af.sce" (Scilab)

```
1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### アフィン変換 #####
3| function x = affine_trans(x0, r, angle)
4|     R = [ cos(angle), -sin(angle); ...
5|           sin(angle),  cos(angle) ]; //回転行列
6|     x1 = R*x0; //回転
7|     x = x1 + r; //平行移動
8| endfunction
9| ##### データ点列の変換 #####
10| function points = trans_object(r, angle)
11|     // 初期のデータ点列(三角形) //
12|     points=[ 2,-4, 2; ... //x座標
13|              2,-1,-1 ]; //y座標
14|     n=size(points,'c'); //点の数
15|     // 座標変換 //
16|     for i=1:n
17|         oldp = points(:,i);
18|         newp = affine_trans(oldp, r, angle); //アフィン変換
19|         points(:,i) = newp;
20|     end
21| endfunction
22| ##### データ点列の描画 #####
23| function draw_object(points)
24|     drawlater; clf(); //描画延期; 描画クリア;
25|     points=[points, points(:,1)]; //描画用に図形を閉じる
26|     plot(points(1,:),points(2:,:),"r-"); //折れ線グラフ
27|     g=gca(); g.isoview="on"; //座標軸の取得; 縦横比1;
28|     g.data_bounds=[-10,-10;10,10]; //座標軸の範囲
29|     p=gce(); p.children.thickness=3; //描画線の太さ
30|     xlabel("x"); ylabel("y"); //軸ラベル
31|     xgrid(2); drawnow; //グリッドon; 描画更新;
32| endfunction
33| ##### 処理の実行 #####
34| rr=[0;0]; theta=0; //初期姿勢
35| points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
36| draw_object(points);
37| while(1) //意図的な無限ループ
38|     disp([rr',theta]); disp(points); //コンソールへ数値を出力
39|     txt = ['rx','ry','theta (deg)'];
40|     sig0 = string([rr;theta]);
41|     sig = x_mdialog("Position and Angle", txt, sig0);
42|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
43|         break; //while脱出
44|     end
45|     rr(1) = evstr(sig(1)); //x方向変位
46|     rr(2) = evstr(sig(2)); //y方向変位
47|     theta = evstr(sig(3)); //姿勢角
48|     points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
49|     draw_object(points); //データ点列の描画
50| end
```

Code 2: "kine-H.sce" (Scilab)

```
1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### 同次変換 #####
3| function x = H(x0, r, angle)
4|     A = [ cos(angle), -sin(angle), r(1); ...
5|           sin(angle),  cos(angle), r(2); ...
6|           0,           0,           1 ]; //同次変換行列
7|     x1 = A*[x0;1]; //ダミー成分1を付けて同次変換
8|     x = x1(1:2); //ダミー成分の除去
9| endfunction
10| ##### データ点列の変換 #####
11| function points = trans_object(r, angle)
12|     // 初期のデータ点列(三角形) //
13|     points=[ 2,-4, 2; ... //x座標
14|              2,-1,-1 ]; //y座標
15|     n=size(points,'c'); //点の数
16|     // 座標変換 //
17|     for i=1:n
18|         oldp = points(:,i);
19|         newp = H(oldp, r, angle); //同次変換
20|         points(:,i) = newp;
21|     end
```

```

22| endfunction
23| ##### データ点列の描画 #####
24| function draw_object(points)
25|     drawlater; clf(); //描画延期; 描画クリア;
26|     points=[points, points(:,1)]; //描画用に図形を閉じる
27|     plot(points(1,:),points(2,:),"r-"); //折れ線グラフ
28|     g=gca(); g.isoview="on"; //座標軸の取得; 縦横比1;
29|     g.data_bounds=[-10,-10;10,10]; //座標軸の範囲
30|     p=gce(); p.children.thickness=3; //直前の描画の線の太さ
31|     xlabel("x"); ylabel("y"); //軸ラベル
32|     xgrid(2); drawnow; //グリッドon; 描画更新;
33| endfunction
34| ##### 処理の実行 #####
35| rr=[0;0]; theta=0; //初期姿勢
36| points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
37| draw_object(points);
38| while(1) //意図的な無限ループ
39|     disp([rr',theta]); disp(points); //コンソールへ数値を出力
40|     txt = ['rx','ry','theta (deg)'];
41|     sig0 = string([rr;theta]);
42|     sig = x_mdialog("Position and Angle", txt, sig0);
43|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
44|         break; //while脱出
45|     end
46|     rr(1) = evstr(sig(1)); //x方向変位
47|     rr(2) = evstr(sig(2)); //y方向変位
48|     theta = evstr(sig(3)); //姿勢角
49|     points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
50|     draw_object(points); //データ点列の描画
51| end

```

Code 3: "kine-robo.sce" (Scilab)

```

1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### 同次変換(3次元) #####
3| function A = Rotz(q)
4|     A = [cos(q), -sin(q), 0, 0; ...
5|         sin(q),  cos(q), 0, 0; ...
6|         0,      0,  1, 0; ...
7|         0,      0,  0, 1];
8| endfunction
9| function A = Rotx(q)
10|    A = [1, 0, 0, 0; ...
11|        0, cos(q), -sin(q), 0; ...
12|        0, sin(q),  cos(q), 0; ...
13|        0, 0, 0, 1];
14| endfunction
15| function A = Trans(r1,r2,r3)
16|    A = [1, 0, 0, r1; ...
17|        0, 1, 0, r2; ...
18|        0, 0, 1, r3; ...
19|        0, 0, 0, 1];
20| endfunction
21| ##### データ点列 #####
22| global HandData;
23| ##### マニピュレータ形状データの生成 #####
24| function points = trans_object(th) // th=[th1,th2,th3,th4]
25|     // 手首~手先の形状データ列(4点) //
26|     l1 = 0.8; l2 = 0.8; l3 = 0.8;
27|     hand = [ 0, 0, 0, 0; ... //x成分
28|             0, -0.2, 0.2, 0; ... //y成分
29|             0, 0.2, 0.2, 0; ... //z成分
30|             1, 1, 1, 1 ]; //タミー成分1
31|     // 同次変換行列 //
32|     R2 = Rotz( th(4) );
33|     T3 = Trans(0,0,l3);
34|     R4 = Rotx( -th(3) );
35|     T5 = Trans(0,0,l2);
36|     R6 = Rotx( -th(2) );
37|     T7 = Trans(0,0,l1);
38|     R8 = Rotz( th(1) );
39|     // 形状データの生成 //
40|     for i=1:4 //手首~手先(4点)
41|         oldp = hand(:,i);
42|         newp = R8*T7*R6*T5*R4*T3*R2*oldp;
43|         xi1s(:,i) = newp;
44|     end
45|     xi4 = R8*T7*R6*T5*[0;0;0;1]; //肘
46|     xi5 = R8*T7*[0;0;0;1]; //肩
47|     xi6 = [0;0;0;1]; //根本
48|     xx = [ xi1s, xi4, xi5, xi6 ]; //一筆書きの点列

```

```

49|     points = xx(1:3,:);           //ダミー成分(4行目)除去
50| endfunction
51| ##### データ点列の描画 #####
52| function draw_object(pts)
53|     drawlater; clf();           //描画延期; 描画クリア;
54|     param3d(pts(1,:),pts(2,:),pts(3,:)); //3次元折れ線グラフ
55|     g=gca(); g.isoview="on";     //座標軸の取得; 縦横比1;
56|     g.data_bounds=[-0.5,-0.5,0;2,2,2.5]; //座標軸の範囲
57|     g.rotation_angles=[75,30];   //3次元透視角度
58|     p=gce(); p.thickness=3;      //描画線の太さ
59|     p.foreground=5;             //描画線の色番号
60|     xlabel("X"); ylabel("Y"); zlabel("Z"); //軸ラベル
61|     xgrid(2); drawnow;         //グリッドon; 描画更新;
62| endfunction
63| ##### 処理の実行 #####
64| thdeg = [-40, 60, 30, 90];      //初期姿勢 deg
65| points=trans_object( thdeg*pi/180 );
66| draw_object(points);
67| while(1) //意図的な無限ループ
68|     disp(thdeg); disp(points); //コンソールへ数値を出力
69|     txt = ['th1 (deg)', 'th2 (deg)', 'th3 (deg)', 'th4 (deg)'];
70|     sig0 = string(thdeg);
71|     sig = x_mdialog("Angles", txt, sig0);
72|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
73|         break; //while脱出
74|     end
75|     thdeg = evstr(sig)'; //姿勢角 deg
76|     points=trans_object( thdeg*pi/180 );
77|     draw_object(points); //データ点列の描画
78| end

```